

五峰阪口仁一郎と震卿吉田東伍の交流

——五峰「贈吉田震卿」詩を中心に——

藤 富 史 花

一、はじめに

阪口五峰（安政六年（一八五九）—大正十二年（一九二三））といえ、今は作家坂口安吾の父親としてのみ、その名を知られる人であろうか。新潟県会議員を経て衆議院議員を八期務め、新潟米穀株式取引所理事長、新潟新聞社長なども歴任した名士であるが、漢詩人としての顔も持つ人物であった。その漢詩文は没後、大正十四年（一九二五）十月に『五峰遺稿』三巻として刊行されている。また『北越詩話』上下巻（上巻は大正七年（一九一八）十一月刊、下巻は大正八年（一九一九）三月刊）を著わしたが、これは千人を超える北越の文人たちの伝記と漢詩とを収め、北越の文学史を知ることができるでも欠かせない書となっている。

近年では新潟大学の田春娟氏が漢詩人としての五峰に焦点を当て、陸統と論文を発表しておられる。漢詩に於ける題材や語句の用法、

当時の漢詩壇や他の漢詩人たちとの交流といった様々な観点から、漢詩人五峰の肖像を具体的に浮かび上がらせようとする試みである。

田春娟氏の一連の論考の中では、五峰と漢詩人小野湖山、鱸松塘、巖谷一六との関わりなどが組上に載せられているが、その中の一つ「漢詩人としての吉田東伍—漢詩人阪口五峰との関わり—」⁽¹⁾という論文で吉田東伍（元治元年（一八六四）—大正七年（一九一八））という人物との関係が取り上げられている。わざわざ「漢詩人としての」という語が冠されていることから分かる通り、一般に東伍は漢詩人としてではなく歴史地理学者として知られる人である。早稲田大学教授となり、のち同校理事も務めた。特にその著『大日本地名辞書』は、十三年の歳月を費やし独力で完成させた古今未曾有の大地誌として名高く、今日でも版を重ねている。歴史地理学以外にも能楽の造詣が深く、『世子六十以後申楽談儀』（『申楽談儀』）を校訂、これが世阿弥伝書の発見につながる契機となったことでも知られる。東伍は斯くのごとく多方面にその才能を発揮したが、『松

雲詩草』という漢詩集もあり、詩文にも心を寄せる人物であった。

田春娟氏の論文は『松雲詩草』をはじめ、その他種々の資料に拠りながら五峰と東伍の交流の姿を明らかにするものである。殊に、五峰が東伍へ送った七言絶句二首が書かれた年賀状は、五峰の「士大夫」的漢詩人^③としての姿を窺わせるものとして読む者の注意を惹く。

五峰が東伍へ寄せた漢詩としては他にも、『大日本地名辞書』の完成を祝って贈った「贈吉田震卿」と題する長編の古詩がある（「震卿」は東伍の別号）。五峰と東伍との親交の様子や、五峰の東伍に対する理解の在り様が窺えて非常に興味を惹くものであるが、残念ながら前述の田春娟氏論文ではこの作品が取り上げられていない。

「贈吉田震卿」詩は『北越詩話』下巻^④、『吉田東伍博士追懷録』、『五峰遺稿』巻下の三書への載録が確認できるが、それぞれの本文間には異同があり、その推敲の跡を辿ることができる。また、『吉田東伍博士追懷録』所収の該詩には森槐南による評語が付されているが、別紙に朱で書かれた槐南自筆の評語が軸装されて現存する。これは、五峰の手許にあったのを人の需めに応えて譲ったものらしく、槐南の評語と共に軸装された五峰自筆の識語によってその経緯を知ることができる。このように、詩の推敲の跡を辿ることができたり、漢詩を介した人々の交流を窺えたりする点でも「贈吉田震卿」詩は興味深い。

本稿では田春娟氏の驥尾に付して、「贈吉田震卿」詩を中心に五

峰と東伍の関わりについて若干の補足を試みるとともに、当時の漢詩人や文人たちの風雅の交わりについて、具体的な様相の一端を明らかにしたい。

二、阪口五峰について

坂口安吾の友人であった作家石川淳には五峰についての伝記があり、次のような書き出しで始まる。

五峰、坂口氏。ただし、みづから好んで坂を阪に作る。諱恭。字溫人、一に字思道。通稱仁一郎。五峰はその號である。晩に蘇庵、また更生道人と號した。安政六年己未（一八五九）正月三日、越後國中蒲原郡阿賀浦村字大安寺に生まれ、大正十二年癸亥（一九二三）十一月二日、東京戸塚の僑居に没す。行年六十五。^⑦

五峰の長子、阪口猷吉の撰した「先考五峰先生阪口府君行述」（『五峰遺稿』巻下）に就いてその履歷を今少し詳しく見ると、次のようである。

其居七松莊、隔阿賀川遙對五頭山。因號五峰又七松山人。幼而穎悟。年甫十三、入大野恥堂門。恥堂觀其詩激賞。先考感奮。從是好作詩、吟哦不絶口。年十八舉爲里之學務員。處事老成、嶄然見頭角。衆謂阪口氏有子矣。明治十二年爲新潟米商會所肝煎。會所則今之新潟米穀取引所也。因寓新潟市。十七年舉爲縣

會議員。時尾崎行雄、箕浦勝人、市島謙吉等交來、主新潟新聞。先考日夕過從論議時事。慨然有濟世志。及大隈侯立改進黨、參之。持論穩健、同志雲集樹義。聲於北越之野、竟爲縣會議長。又攝理新潟新聞社、爲其社長。二十四年爲衆議院議員。蓋先考當事夷險一節具有終始。故爲縣會議員則及十九年之久。爲衆議院議員則八回。更選其間爲代議士會長、爲憲政會總務。而取引所則自理事普理事長。以畢其世矣。

(其の居七松莊、阿賀川を隔てて遥かに五頭山に對す。因りて五峰又た七松山人と号す。幼くして穎悟。年甫めて十三、大野恥堂の門に入る。恥堂其の詩を觀て激賞し、先考感奮せり。是れより作詩を好み、吟哦口に絶えず。年十八挙げて里の学務員と爲る。事を処するに老成、嶄然として頭角^{あらは}を見はす。衆阪口氏に子有りと謂ふ矣。明治十二年新潟米商会所肝煎と爲る。会所は則ち今の新潟米穀取引所也。因りて新潟市に寓す。十七年挙げて県會議員と爲る。時に尾崎行雄、箕浦勝人、市島謙吉等交ごも來たり、新潟新聞を主る。先考日夕過從して時事を論議す。慨然として濟世の志有り。大隈侯の改進黨を立つるに及び、之れに參す。持論穩健、同志雲集して義を樹つ。北越の野に声あり、竟に県會議長と爲る。又た新潟新聞社を攝理し、其の社長と爲る。二十四年衆議院議員と爲る。蓋し先考事に當たるに夷險一節、具に終始有り。故に県會議員爲ること則ち十九年の久しきに及ぶ。衆議院議員と爲ること則ち八回。更選して

其の間代議士會長と爲り、憲政會總務と爲る。而して取引所は則ち理事より理事長に晋む。以て其の世を畢ふ矣。)

五峰は少年の頃から漢詩を好み、詩作に励んでいたことが知られる。「市島謙吉」と名前が見えるのは五峰終生の莫逆の友、市島春城であるが、春城は五峰の漢詩について「好作詩、清新雄麗、盡棄浮靡。而敦厚之意至矣(作詩を好くし、清新雄麗にして、尽く浮靡を棄つ。而して敦厚の意至れり矣)」(『五峰遺稿』卷下跋文)と評する。

また春城は、五峰と次のようなエピソードも紹介している。

私が十數年前新潟へ歸省して君の家を訪ふた時、座敷に從前みたことのない二枚折の屏風があつた。よく見ると、栢木如亭が例の得意の吉原詞二十首を題したもので、周邊は繪表装で、極彩色の百花が如何にも見事に描かれてゐる。繪には落款はないけれども、浦上春琴の筆であらうと判じて、内々食指が動いたが、詩人の家にはふさわしいものだ、無心がましい事も言はず、唯々しきりに賞翫して別れた。丁度其日數名の郷友に招かれた席で、醉中此屏風を激賞した揚句自分の心の秘密が聊か洩れた、それが端なく五峰君に傳へられたと見えて、翌朝君は私の旅館へ訪ねて來て、昨日御覽になつた如亭の屏風にお思召があるなら進上すると言はるゝので、私も昨日口走つたことを内々後悔して辭退すると五峰君の言はるゝことが案外であつた。實はあの屏風は與板の三輪家の賣立に出たものを購つたの

であるけれども、狹斜の詩を書いた屏風だから置き所に窮して、持て餘してゐる幸に君のお恩召に叶へば、もつめの幸だ。どうか貰つてくれ給へ、破損の處は修補して東京へ遞送すると言はれ、終に辭し兼ねて貰ひ受けたが、如亭も春琴も共に北越に漫遊の日、三輪家に宿泊中主人の嘱に應じて書いたものであることが知れた、君の片身として珍藏してゐる。五峰君は書畫に鑑識もあり収藏に興味あつたが、何事にも恬淡で執着のない人であつた、此事も其の一例である⁽⁸⁾。

この逸話は、恬淡として物に拘らない五峰の人柄を活写するものであるが、如亭屏風購入は『北越詩話』にまとめるための資料収集という真摯な目的であつたことを韜晦する、五峰の魅力的なポーズでもあつたかもしれない。柏木如亭や浦上春琴は江戸後期の文人である。柏木如亭をはじめとする江戸後期の江湖詩社の漢詩人について主に関心を有する筆者が、本稿で五峰の漢詩を考察の対象としたのは、斯く五峰が江戸の詩人たちにも一方ならぬ関心や愛着を抱いていた⁽⁹⁾ことを知つたのが理由の一つである。

三、坂口仁一郎と吉田東伍の関わり

五峰は、東伍との出会いや親交について次のように述懐する。

私が始めて吉田君を識つたのは年月の記憶はないが、場所は市島春城君の宅であつた、併し當時は唯識つたといふだけで懇

意といふ程のものでは無かつた。其後日清戦役中私が縣會議長で天機奉伺に廣島へ出かけ一周日餘の滞在中吉田君は従軍の目的で廣島に居られ數々往來し始めて懇意になつた、時は明治廿七年十二月の末で第二師團の貔貅が廣島に屯營して只管出征を待つてゐた時である。(中略)私は落日寡交ともいふべきもので在京の郷友中で眞の莫逆と稱す可きものは市島君と君(吉田東伍、筆者注)だけである、故に君も歸省毎に必ず尋ねてくれた⁽¹⁰⁾。

「君も歸省毎に必ず尋ねてくれた」という五峰の言は誇張ではなく、実際に帰省の度に二人は互いを訪ねていたことが窺える次のような書簡(吉田文庫蔵)もある。

貴翰拜讀仕候。御來市之趣故、是非得拜晤度奉存候へとも、小生去月來病氣にて未だ全治二至らず、唯縣会本議員候補選定差廻り居候爲め不得已強て他出、先刻歸宅之上、留守中御電話ありし由承り、直に御宿へ電話にて御伺申上候處、御不在のよしにて遺憾に御座候次第故、貴報に隨ひ直に伺候可致筈に候へとも、朝來の他出にて非常に疲労せし上、約束の人を待ち居候次第にて遺憾にもあり、且は失礼にも有之候へとも拜趨致兼候間、不惡御諒恕奉祈上候。書外萬在拜首。草々頓首。

八月十九日 仁一郎

吉田博士 侍史

新潟に帰省した東伍が五峰宅を訪ねようと電話をしたが、生憎五

峰は外出中で不在であった。帰宅してそのことを知った五峰は東伍の宿に電話をかけるが、今度は折悪しく東伍が不在、本来であれば五峰が直接東伍のもとへ赴くべきところ、朝からの外出による疲れや他の約束もあるため、伺候能わざることを詫げる東伍宛ての五峰書簡である。

また、漢詩においては東伍が自身の草稿に五峰の添削を乞うていたことが知られる。東伍の「松雲詩草」草稿（吉田文庫蔵）表紙には「五峰詞宗 文壇下／請 嚴正／庚戌十月初五 弟吉田東伍拜」とあり、草稿には五峰の朱筆による添削が見える。これについては池澤一郎氏「漢詩人吉田東伍——『國朝詩綜』と『松雲詩草』——」^⑪に詳しく、「博士（吉田東伍、筆者注）が「先生」五峰の意見に盲従していたわけではないということである。両者の火花を散らすような応酬は壯観を呈している。とるべきはとり、さらに反論すべきは反論して、五峰の意見を自らの推敲に生かしていた経緯が如実に看取される」との指摘がある。

両者の友情は斯くの如く濃やかであった。次節では、五峰の東伍に対する深い理解や親愛の情を具体的に窺わせる詩、「贈吉田震卿」を検討する。

四、五峰「贈吉田震卿」詩と改稿経緯

「一、はじめに」で述べたように、五峰「贈吉田震卿」詩は『北

越詩話』下巻（大正八年（一九一九）三月）、『吉田東伍博士追懷録』（大正八年九月）、『五峰遺稿』（大正十四年（一九二五）十月）の三書に載録され、それぞれに異同がある。各書の記述や刊行年次、関連資料からその成立順や改稿経緯を推測すると次のようになる。

①明治四十年（一九〇七）の『大日本地名辞書』完成時に初稿「贈田震卿」が成立。

初稿に近い形であると思われるのが、『北越詩話』下巻（卷十）「吉田東」所載のものと、『吉田東伍博士追懷録』『同人寄藻』所載のものとは異なる。両者には若干の異同があるが、句意が変わるほどの大きな違いではなく、どちらが推敲の前後とは見分け難い。また、両書の刊行年次は近く、どちらも大正七年一月に東伍が亡くなったことを承けて五峰が東伍との交友を追想する記述を伴う。

②森槐南の添削、評語を踏まえて五峰が推敲。^⑫

③推敲を経た「贈吉田震卿」が、五峰没後『五峰遺稿』巻下に載録される。

次に、成立順に詩の本文を見ていく。まずは詩題と自引、森槐南評語を具備する『吉田東伍博士追懷録』『同人寄藻』所載の「贈田震卿」である。『北越詩話』巻十「吉田東」に所載のものは詩題、自注、森槐南評語を欠く（両者には若干の異同があるが後述）。原文は白文で、句読点や傍線、訓読は筆者によるものである（以下同じ）。詩の本文の傍線は、後掲『五峰遺稿』巻下所収「贈吉田震卿」

との異同を示す。

「贈田震卿」(「田震卿に贈る」)

〔自注〕震卿嗜酒。而長史學。其大日本地名辭書凡一千二百萬言、
閱十三年而成。稿本今藏早稻田大學圖書館。高一丈五尺有奇。古今
大著莫之過也。田半迂爲刻一千二百萬言酒中成印以贈。予乃作長歌
副之。

(震卿酒を嗜む。而して史學に長ず。其の『大日本地名辭書』凡そ
一千二百萬言、十三年を閲して成る。稿本今早稻田大學圖書館に
蔵す。⁽¹³⁾高さ一丈五尺有奇。古今の大著之れに過ぐる莫き也。田半
迂爲に「一千二百萬言酒中成」の印を刻し以て贈る。予乃ち長歌
を作り之れに副ふ。)

- 1 一千二百萬言酒中成 一千二百萬言 酒中に成る
- 2 藝林爭説田震卿 藝林 争つて説く 田震卿
- 3 想見四千六百八十日 想見す 四千六百八十日
- 4 日々引盃不停筆 日々盃を引きて筆を停めず
- 5 仙才不慕青蓮儔 仙才 慕はず 青蓮の儔
- 6 周覽縦作太史遊 周覽 縦に作す 太史の遊
- 7 金匱石室破萬卷 金匱石室に万卷を破り
- 8 鉛槧就人更諮諏 鉛槧 人に就きて更に諮諏す
- 9 脚跟歷々八洲地 脚跟 歷々たり 八洲の地
- 10 胸中昭昭千古事 胸中 昭昭たり 千古の事

- 11 山川能説眞大夫 山川 能く説くは眞の大夫
 - 12 徵諸目驗考同異 諸を目驗に徴して 同異を考ふ
 - 13 鴻荒世界山海經 鴻荒たる世界 山海經
 - 14 太平風土寰宇記 太平たる風土 寰宇記
 - 15 囊天括地無不有 天を囊にし地を括りて有らざる無し
 - 16 典該豈翹鄭虔比 典該なること 豈に翹に鄭虔の比ひな
るのみならんや
 - 17 流傳遍湖海 流伝して 湖海に遍く
 - 18 歛爾聲名揚 歛爾として 声名揚がる
 - 19 俄聞洛陽市 俄かに聞く 洛陽の市
 - 20 紙價百倍昂 紙価 百倍に昂がると
 - 21 我本同鄉同門舊 我 本より同郷同門の旧みあり
 - 22 聞之驚喜走欲仆 之れを聞き驚喜して走り仆れんと欲す
 - 23 傾囊沽取數大樽 囊を傾け沽ひ取る 數大樽
 - 24 去就君家爲君壽 去きて君が家に就き 君の為に壽ぐ
 - 25 盃中千斛萬斛春 盃中 千斛万斛の春
 - 26 十二萬年無匹倫 十二万年 匹倫無からん
 - 27 著書之高一丈五六尺 著書の高さ 一丈五六尺
 - 28 爲君米汁供養佛現身 君が為 米汁を供養すれば仏身を現さ
ん
- 森槐南曰左傳絳縣人紀年有四百四十五甲子二萬六千六百有六句等
文、李青蓮三萬六千日、三萬六千鈞、皆用此算法。五峰此作、蓋有

所自矣。田氏新著、人稱其精該、余未經寓目。今讀此詩、信名下固無虛也。

(森槐南曰く、左傳の「絳県の人紀年有四百四十五甲子二万六千六百有六句」等の文、李青蓮の「三万六千日」、「三萬六千鈞」、皆な此の算法を用ゐる。五峰の此の作、蓋し自る所有り矣。田氏の新著、人其の精該を称するも、余未だ寓目を経ず。今此の詩を読み、名下固に虚無きを信する也。)

二十八句から成る雑言体の古詩である。『北越詩話』巻十では第九句目「八洲地」が「九州地」、第十六句目「豈翹」が「奚翹」、第十七句目「遍湖海」が「徧湖海」、第十八句目「聲名」が「名聲」、第二十三句目「數大樽」が「三大樽」、第二十四句目の「爲君壽」が「作君壽」となっており、計六箇所の変更がある。

自注によれば、東伍の『大日本地名辞書』が完成した際、それを祝して「田半迂」(篆刻家の吉田半迂)が「一千二百萬言酒中成」の印を刻して東伍に贈ったが、その印に添えた詩であるという。この「一千二百萬言酒中成」の印は『吉田東伍博士追懷録』にもその印影が載っており、また同書で市島春城は「地名辭書の成つた時、記念の爲に人の贈つた印に「一千二百萬言酒中成」と刻してあるの、君の平生を知らぬものは如何にも酒を飲みながら筆を執つたかの如くに考へ⁽¹⁴⁾」ている、と語っている。東伍はこの印を愛用し、またその印文も広く知られていたようである。

四句ごとにひとまとまりになっているので、四句ずつその内容を見ていく。

第一句目から第四句目までは、東伍の十三年間にわたる『大日本地名辞書』執筆の様子を詠む。「酒中に成る」や「日々盃を引きて」とその執筆が酒を伴うものであったと戯れながらも「一千二百萬言」や「四千六百八十日」と、執筆した文字数や費やした日数を具体的な数字で表すことで、東伍が爲した著作の偉大さを印象付けている。またそれによって「藝林争つて説く田震卿」とその評判が高いことも読む人に当然のことと感ぜられるようになっていく。

第五句目から第八句目までは歴史上の人物と対比しながら、『大日本地名辞書』の執筆が全国各地を遊歴し、万卷の書を博搜読破し、執筆に当たってはその上にまた種々の検討が加えられたことを述べる。「青蓮」は盛唐の詩人李白。号は青蓮居士。同じく盛唐、杜甫「飲中八仙歌」の「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠(李白一斗詩百篇、長安市上酒家に眠る)」が人口に膾炙するように、李白は酒を好んだ詩人として知られる。「青蓮儔」は、李白のように酒に溺れることだが、東伍は酒を飲んでも酩酊して正体をなくすようなことはなかったとその執筆姿勢に理解を示す。「太史」は前漢の歴史家司馬遷。父の職を継いで太史令となり、自ら太史公と称した。若いころに諸地方を旅して古い記録を収集しており(『史記』『太史公自序』)、「太史遊」はそれを踏まえる。「金匱石室」は金で作った箱と石で作った室。書籍を厳重に保管する場所。『史記』『太史公自序』に「卒三

歳而遷為太史令、紬史記石室金匱之書（卒して三歳にして、遷、太史令と為り、史記・石室金匱の書を細く）」とあるのを踏まえるであろう。

第九句目から第十二句目までは、東伍の足跡が全国に遍く、またその胸中には古來からの各地の事歴が蓄えられていることを称する。「山川能く説く」は、古く大夫が備えるべきとされた九種の才能のうちの一つ。「目驗」は自らの目で見て検証すること。⁽¹⁶⁾単に書物に拠るのではなく、その記述を東伍が自身の目で実地に検証していることを評価する。

第十三句目から第十六句目までは中国の地理書の名を挙げ、それらの浩瀚な書と比しても東伍の『大日本地名辞書』は何らの遜色なく、広く天地の間の事跡について述べていることを称する。「山海經」は中国古代の地理書。十八卷。作者・成立年未詳。戦国時代の資料も含まれるが、前漢以降の成立とされる。洛陽を中心に地理・山脈・河川や物産・風俗のほか神話・伝説などを収録。「寰宇記」は『太平寰宇記』の略。中国の地理書。二〇〇巻、目錄二卷。宋の樂史撰。六朝以来の史料を利用し、詩や案文を引用・添付し、批判考証を加え、後世の地理書の規範となる。「鄭虔」は唐の玄宗時期の学者。地理学、また詩・書・画に長け、多くの著書をものした。第十七句目から第二十句目までは、『大日本地名辞書』が世に出るやその名著の誉れ高く、世間で広く読まれ、また東伍の名声も俄然揚げたことを詠じる。「歛爾」は突然なさま。にわかに。「洛陽

の市紙價百倍に昂がる」は、著書の評判がよくて売れ行きのよいこと。晋の左思が三都賦を作った時、これを写す人が多く、洛陽では紙の値が高くなったという『晋書』文苑伝にある故事による。

第二十一句目から第二十四句目までは、東伍の古くからの同郷の友人として、『大日本地名辞書』の出版と好評とを我がことのように歎び寿ぐ五峰の自画像である。「驚喜して走り仆れんと欲す」の語は、その歎びをやや大げさに表現しているようにも感じられるが、東伍の長年の労苦を知る五峰にしてみれば、自身の心情や姿を率直に詠じたものであろう。おかしみの中にも東伍への深い親愛の情が滲む句である。祝いの場に酒はもちろん付き物であるが、それ以前に酒は東伍の好物でもある。彼を祝うためならば、財布をすっからかんにしてでも大きな酒樽を購うのである。第一句目から第四句目までの表現があるからこそ、東伍の好物の酒を買ってその家に駆けつける五峰の衷情が読む者に伝わる構成となっている。

第二十五句目から第二十八句目までは、酒杯を傾けつつ東伍の『大日本地名辞書』が古今に比類のない優れた著作であることを称える。第二十八句目はやや意味が取りにくいが、高さ一丈五六尺にもなる稿本に酒を供えたならば、君のために仏はその姿を現すだろう、と戯れていると考えられる。「米汁」は、酒のこと。「一丈六尺」というのは、釈迦実際の身長であったという説と塑像の場合の誇張という説があるが、『更科日記』などにも「丈六のほとけ」という語があり、古くから釈迦如来像の高さが一丈六尺とされたことを

使つて、吉田東伍の『大日本地名辞書』完成の偉業を讃える。吉田の体軀は小柄であつたが、原稿を縦に積み上げた高さと同じように釈迦如来ほどの長身に見えるという諸諺も含意するであろう。

槐南の評語は、第一句目の「一千二百萬言」や第四句目の「四千六百八十日」といった数字の表現に典拠があることを指摘する。「左傳絳縣人」とは、『春秋左氏伝』襄公三十年に「晉悼夫人、食輿人之城杞者。絳縣人或年長矣。無子而往與於食。有疑年、使之年。曰、臣小人也、不知紀年。臣生之歲、正月甲子朔、四百有四十五甲子矣。其季於今三之一也。」(中略) 士文伯曰、然則二萬二千六百有六句也(晋の悼夫人、輿人の杞を城く者に食らはしむ。絳縣の人 或るもの年長ぜり矣。子無くして往き、食に与る。与にするもの有りて年を疑ひ、之れをして年せしむ。曰く、臣は小人也、紀年を知らず。臣生まるるの歳は、正月甲子朔にして、四百有四十五甲子なり矣。其の季、今に於いて三の一也。(中略) 士文伯曰く、然らば則ち二万二千六百有六句也)」とあるのを指す。「李青蓮三萬六千日、三萬六千鈞」は盛唐、李白「襄陽歌」に「百年三萬六千日、一日須傾三百杯(百年三万六千日、一日須らく三百杯を傾くべし)」、同じく李白「梁甫吟」に「廣張三千六百鈞、風期暗與文王親(広く張る 三千六百鈞、風期 暗に文王と親しむ)」とあるのを指す。「皆な此の算法を用ゐる」とは、数える際に「十二」を一つのまとまりとし、概数を示すという算法がこれらに共通することを指すのであろう。槐南自身は未だ『大日本地名辞書』を目にしていないが、世間が『大日

本地名辞書』を精密該博であると評するのは虚飾ではないことを五峰の詩によつて確信したと評する。「此の算法」を用いているのは、読む人にその内容の具体性や信憑性を感じさせる巧みな措辞であるという五峰への賛辞も暗に含んでいるだろう。

次に引くのは『五峰遺稿』巻下に「贈吉田震卿」の題で収録される作である。自注はあるが、槐南の評語はない。『吉田東伍博士追懷録』「同人寄藻」所載の「贈田震卿」の自注とは若干の異同がある(「田半迂」が「半迂道人」、「印」の下に「以贈」を削除。「副之」が「以贈」)。

「贈吉田震卿」(吉田震卿に贈る)

〔自注〕震卿嗜酒。而長史學。其大日本地名辭書凡一千二百萬言、閱十三年而成。稿本今藏早稻田大學圖書館。高一丈五尺有奇。古今大著莫之過也。半迂道人爲刻一千二百萬言酒中成印。予乃作長歌以贈。

(震卿酒を嗜む。而して史學に長ず。其の『大日本地名辞書』凡そ一千二百萬言、十三年を閲して成る。稿本 今早稲田大学図書館に蔵す。高さ一丈五尺有奇。古今の大著之れに過ぐる莫き也。半迂道人爲に「一千二百萬言酒中成」の印を刻す。予乃ち長歌を作り以て贈る。)

1 一千二百萬言酒中成 一千二百萬言 酒中に成る

- 2 藝林争説田震卿
想見四千六百八十日
- 3 日日引杯不停筆』
- 4 沈湎不仿劉伶儔
- 5 周覽去追史遷游
- 6 金匱石室探秘籍
- 7 恥把鉛槧混時流』
- 8 案上歷歷八洲地
- 9 胸中昭昭千古事
- 10 山川能説眞大夫
- 11 徵諸目驗考同異』
- 12 鴻荒世界山海經
- 13 太平風土實宇記
- 14 囊天括地無不有
- 15 典該豈啻鄭虔比』
- 16 新著播湖海
- 17 歛爾聲名揚
- 18 爭求洛陽市
- 19 紙價百倍昂』
- 20 我與震卿素有舊
- 21 聞之驚喜欲顛仆
- 22

藝林争つて説く 田震卿
想見す 四千六百八十日
日日杯を引きて筆を停めず
沈湎すれども 仿はず 劉伶の儔
周覽 去きて追ふ 史遷の游
金匱石室に秘籍を探り
鉛槧を把りて時流に混じるを恥づ
案上に歷歷たり 八洲の地
胸中に昭昭たり 千古の事
山川 能く説くは眞の大夫
諸を目驗に徴して 同異を考ふ
鴻荒たる世界 山海經
太平たる風土 實宇記
天を囊にし地を括りて有らざる無し
典該なること 豈に啻に鄭虔の比ひな
るのみならんや
新著 湖海に播き
歛爾として声名揚がる
争て求む 洛陽の市
紙価 百倍に昂がる
我 震卿と素とより旧み有り
之れを聞き驚喜して顛仆せんと欲す

- 23 傾囊沽取數大樽
- 24 去就君家爲君壽』
- 25 杯中日照酒生鱗
- 26 十二萬年長成春
- 27 稿本一丈有六尺
- 28 米汁佛子高等身』

囊を傾け沽ひ取る 數大樽
去きて君が家に就き 君の為に寿ぐ
杯中 日照りて 酒に鱗生ず
十二萬年 長へに春を成す
稿本一丈有六尺
米汁仏子 高さ身に等し

傍線部が異同のある箇所だが、特に第五句目から第八句目までと、第二十五句から第二十八句目までが大幅に改められているので、その箇所を中心に推敲の理由を検討、考察したい。

第五句目は「仙才慕はず 青蓮の儔」から「沈湎すれども 仿はず 劉伶の儔」へと句のほとんどが改められている。「劉伶」は西晋の思想家。字は伯倫。竹林の七賢の一人。莊子の思想の実践をし、身体を土木とみなして意欲の自由を求めた。酒を好み、著に「酒徳頌」がある。改稿前の句では、「李白の才を慕わなかった」という意になり、東伍は李白と同じく酒は好んでも、李白のように泥酔沈湎することはなかった、という意味が伝わりづらい。あるいは、東伍は詩仙と称された李白の詩才をも慕わなかったという否定的な意味にも読めてしまう。そこで、李白の代わりに「劉伶」とし、また「沈湎」の語を置くことで、どのような点を見習わなかったのかを明確にしている。劉伶を詠出することで、第十五句目の「囊天括地」の語が「酒徳頌」に「行無轍迹、居無室廬、幕天席地、縦意所如（行

くに轍迹無く、居るに室廬無く、天を幕とし地を席とし、意の如く所を縦にす」とあるのと響き合うことにもなる。

第六句目は「縦まに作す 太史の遊」から「去きて追ふ 史遷の遊」へと改められている。これは改稿後の方が、東伍が歴史家として司馬遷に倣おうとしたことが明確に表現されるとの判断によるものであろう。同時に東伍の先賢を慕う謙虚な姿勢を髣髴とさせる。

第七句目は「万巻を破り」から「秘籍を探り」へと改められている。「金置石室」は書籍を厳重に保管する場所であるが、そこに収められているのは単なる「万巻」の書ではなく、やはり「秘籍」であらう。「秘籍を探り」とすることで一句の中の語の関係がより緊密で相応しい表現となっている。

第八句目は「鉛槧 人に就きて更に諮諏す」から「鉛槧を把りて時流に混じるを恥づ」へと大幅に改められている。これは東伍の学問の姿勢をより正確に描写するための改変と考えられる。「諮諏」はたずねることだが、東伍には特筆すべき学問上の師はおらず、独学独成の人である。⁽¹⁷⁾「鉛槧 人に就きて更に諮諏す」だと、執筆に当たって東伍が他の人に意見を徴したことになるが、「鉛槧を把りて時流に混じるを恥づ」と改めることで、時流に惑わされず、独立独歩で一家の学を成した東伍の姿を見事に描き出している。

第二十一句目は「我 本より同郷同門の旧みあり」から「我 震卿と素とより旧み有り」へと改められている。五峰と東伍は「同郷」ではあるが「同門」に学んだことはないので、「素とより旧み有り」

とすることで実際の二人の関係を示す語句へと変えたものであろう。また、旧稿では「旧」のみで意味を補って「旧みあり」と訓ずる必要があったのをより明確に「有」を本文に添えた。

第二十五句目は「盃中 千斛万斛の春」を「杯中 日照りて 酒に鱗生ず」へと改めている。これは「千」や「万」が、槐南の指摘する「此の算法」には合致しないという判断によるであらう。なお、この日光が杯の酒面に映って煌めくという描写は、北宋、鄭獬「西湖に泛ぶを憶ふ」の「風揺酒面金鱗活、月弄波光玉篆飛（風酒面を揺がせて金鱗活たり、月波光を弄して玉篆飛ぶ）」などに学び、かつ「金」字を措かないで次の句の仏を黄金仏に莊嚴するものであるう。

第二十七句目は「著書の高さ 一丈五六尺」から「稿本一丈有六尺」に改めている。これも「此の算法」に適う数字に改めるとともに、一句の字数を他と揃えるための推敲と考えられる。

第二十八句目は「君が為 米汁を供養すれば仏身を現さん」が「米汁仏子 高さ身に等し」と改められている。これも一句の字数を他と揃えるための変更であらうか。「米汁仏子」つまりお酒の仏様、という語を用いており、より諧謔の感じられる表現となっている。先述したように「諧謔」しながら吉田の偉業を「讀んでいる」のである。

このように、五峰は東伍に詩を贈ったのちも推敲を続け、東伍を評するにより相応しい表現を模索し、また槐南の指摘する「算法」

を詩中に一貫させ、より完成度の高い作品にしようとしていたことがわかる。

また特に頭尾に酒についての語句が置かれるという構成が印象的であるが、これは五峰にとって、東伍との友情と酒とが深く結びついていることが関係しているのかもしれない。五峰は『北越詩話』巻十に「吉田東」として東伍の伝を立て、そこに自身と東伍の親交を示すものとして「贈田震卿」詩を引くが、その後に次のように述べる。

一時の戯作、詩と云ふに足らずと雖も、洛城（東伍の号、筆者注）は以て知己の言と爲せり。嗚乎、予の洛城に於ける、一日の故に非ず。洛城郷に還れば必ず予を訪ひ、予京に入れば亦た必ず洛城を訪ふ。丁巳仲冬、予又た京に入り、春城・洛城と赤坂の旗亭に會す。當時洛城已に病あり。酒を斷つ。而かも謂ふ、故舊相會す。飲まざる可からずと。快酌、夜半に至る。意はざりき、數句の後、忽ち其計を聞かんとは。予が詩話、筆を丁巳に絶つ。而かも親交、洛城の如き、何ぞ之を遺すを得む。今や排印成り、年代の序次に因るを得ずと雖も、前卷已に岡田雲洞の爲めに例を破る。因て豊城と併せて此に編し以て卷尾を賁る。

「一時の戯作、詩と云ふに足らず」は五峰の謙遜の辞であるとしても、東伍が五峰の「贈田震卿」詩を「知己の言」であるとした点は注意を引く。東伍はここまでの自身の苦勞、また学問や執筆態度に対する五峰の深い理解と親愛の情を感じたのであろう。

また注目すべきは、春城を交えた五峰と東伍の生前最後の対面についてのエピソードである。大正六年（一九一七）十一月（丁巳仲冬）、五峰は東伍と春城、三人で赤坂の料亭で会合した。そのとき東伍はすでに病氣であり酒を断っていたが、旧知の友に会ったからには酒を飲まないわけにはいかない、と言って共に夜半まで快飲したという。それから数十日後東伍は逝去したので、赤坂での会合が五峰にとって東伍との今生の別れとなったのであった。

五峰は大正六年には『北越詩話』の原稿を完成させていたが、東伍が亡くなったとなれば親友として彼の伝を立てない訳にはいかない。『北越詩話』はその人の生年順に配列するという方針を取るが、すでに活字が組まれていたため、東伍の伝を途中に挿入することはできなかった。配列からは外れるが、東伍との友情を重んじ、彼の伝を以て巻尾を飾るのだという。

見てきたように、「贈田震卿」詩は五峰の飽くなき推敲の跡を示すだけでなく、その推敲が東伍との友情と深い理解に基づくものであることを窺わせる。また五峰自身にとっても、東伍との親交を象徴する思い出深い作品であったことがわかる。

五、森槐南の評語

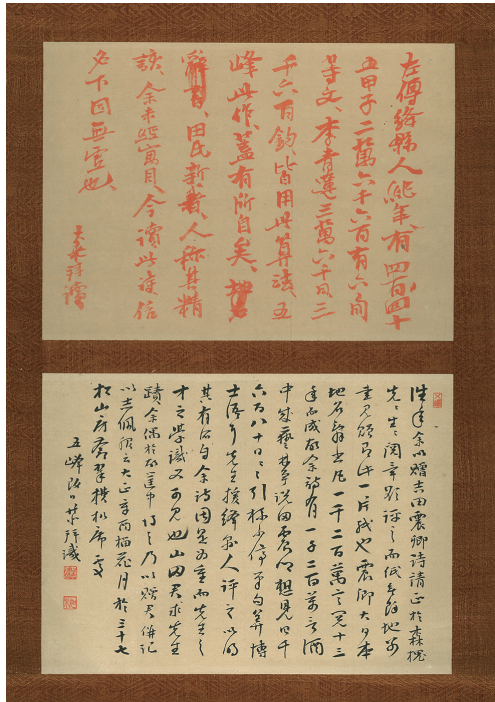
前掲のように『吉田東伍博士追懷録』『同人寄藻』所載の「贈田震卿」には森槐南の評語が付されていたが、別紙に書されたその槐

南評語は、五峰による識語とともに軸装されて現存する（【図】参照、個人蔵）。五峰が自作に対する槐南の評をどのように受け止めていたかが窺えるので、次に全文の翻刻と訓読とを示す。

《森槐南評語》

左傳絳縣人紀年有四百四十五甲子二萬六千六百有六句等文、李青蓮三萬六千日、三千六百鈞、皆用此算法。五峰此作、蓋有所自矣。地名辭書、田氏新著、人稱其精該、余未經寓目。今讀此詩、信名下固無虛也。大來拜讀。

（左伝の「絳県の人紀年有四百四十五甲子二万六千六百有六句」等の文、李青蓮の「三万六千日」、「三千六百鈞」、皆な此の算法を用ゐる。五峰の此の作、蓋し自る所有り矣。地名辞書、



【図】 森槐南評語、阪口五峰識語

田氏の新著、人其の精該を称するも、余未だ寓目を經ず。今此の詩を読み、名下固に虚無きを信ずる也。大來拜読。）

《阪口五峰註》

往年余以贈吉田震卿詩、請正於森槐南先生。々々閱畢欲評之。而紙無餘地、別書見贈。即此一片紙也。震卿大日本地名辭書凡一千二百萬言、閱十三年而成。故余詩有「一千二百萬言酒中成、藝林爭說田震卿、想見四千六百八十日、々々引杯不停筆」句。筭博士語耳。先生援絳縣人評之以明其有所自。余詩因是爲重。而先生之才之學識又可見也。山田君求先生蹟。余偶於故篋中得之、乃以贈君併記以志佩服云。大正辛酉榴花月於三十七松山房蒼翠橫机席處。五峰阪口恭拜識

（往年余「吉田震卿に贈る」詩を以て、正を森槐南先生に請ふ。先生閱し畢はりて之れを評さんと欲す。而れども紙に餘地無く、別に書して贈らる。即ち此の一片紙也。震卿の『大日本地名辞書』凡そ一千二百萬言、十三年を閲して成る。故に余が詩に「一千二百萬言酒中成、藝林爭說田震卿、想見四千六百八十日、々々引杯不停筆」の句有り。博士の語を筭するのみ。先生絳県の人を援きて之を評し以て其の自る所有るを明らむ。余が詩是れに因りて重きを為す。而して先生の才の学識も又た見るべき也。山田君¹⁸⁾先生の蹟を求む。余偶たま故篋中に之れを得、乃ち以て君に贈り併記して以て佩服に志すと云ふ。大正辛酉榴花月¹⁹⁾於三十七松山房蒼翠橫机席處。五峰阪口恭拜識）

朱筆で書かれた槐南の評語は、前引『吉田東伍博士追懷録』『同人寄藻』所載の「贈田震卿」に付されたものとほとんど異同はないが、「地名辭書」と書いたのを消して「田氏新著」に改めていたことがわかる。

五峰の識語によれば、「贈吉田震卿」詩を作った際、槐南に添削を乞うたがその紙には評語を書き入れる余地がなかったので、槐南は別紙に評語を記して贈ってくれたという。詩に「一千二百萬言酒中成、藝林爭說田震卿、想見四千六百八十日、ミミ引杯不停筆」とあるのは、ただ東伍（博士）の言葉を詠み込んだだけだが、槐南がその算法に由来のあることを指摘してくれたので、自身の詩が（単なる戯れの作ではなく）きちんと典故のある重みのあるものになった、として槐南の才、学識に敬意を表している。五峰が筆を執ってこの識語を書いたのは大正十年（一九二一）三月（大正辛酉榴花月）のこと、「山田君」が槐南の筆跡を需めたので、偶然筐中に藏してあったこの評語を見つけて贈ったという経緯が記されている。

五峰が、槐南評語によって詩中に用いた数字の算法に典拠があることが指摘された、と述べている点は特に注目される。やはりこの槐南の指摘があったからこそ、五峰は詩中の数字に一貫して「此の算法」を用いるように改めて意識し、それに合わない第二十五句目の「千斛万斛」の語を削ったり、第二十七句目の「著書の高さ一丈五六尺」を「稿本一丈有六尺」と推敲したりしたのである。一丈五六尺」は、実際の原稿の高さを表現した語ではあるが、「十二」

を基本とする「此の算法」からは外れる。⁽²⁰⁾

市島春城は五峰の詩作への態度について「眞摯の君（筆者注、五峰）はいつも自作に慊らず、此句は尚ほ推敲を要するなど言はれ、得意の作だなど、自讃されたことは一回も無かつた」と評している⁽²¹⁾が、このようにその推敲過程を見てくると、春城の言が誇張でなかったことが知られる。五峰は他からの批評を真摯に受け止め、より良い表現を追求して推敲を続けたのである。

六、結び

ここまで「贈吉田震卿」詩について、主に『吉田東伍博士追懷録』『同人寄藻』と『五峰遺稿』巻下所収の本文とを比較することで推敲の過程を検討し、その推敲は五峰と東伍の親交や、槐南の評語が深くかわっていることを明らかにした。

これらによって漢詩を媒介とした人々の交流の様子もまた具体的に浮かび上がる。友人に喜ばしい出来事があれば、祝福の意を込めた詩を作って贈る。友人亡き後、その詩は友人との断琴の交わりを思い起こす縁ともなってくれるのである。また、詩が成れば師に斧正を乞い、その評を承けて自身の作を推敲して表現に磨きをかける。今さら言うまでもないことではあるが、やはり漢詩は単に自己表現の手段であるだけでなく、人々にとって重要な媒、コミュニケーションツールであった。

今回は「贈吉田震卿」詩一首のみを検討考察の対象としたが、このように人々の交流の様相を窺わせる具体的な事例を他にも多数検討していくことで、今後近世から明治大正にかけての文人たちの肖像を多面的に明らかにしていきたい。

注

- (1) 「新潟新聞」九千号から読む阪口五峰と小野湖山」(『新潟県文人研究』第十九号、二〇一六年十一月)、「漢詩人阪口五峰と鈴木(鱸) 松塘——二人の贈答詩を中心に——」(『表現文化研究』第十六号、二〇二〇年三月)、「漢詩人阪口五峰と巖谷一六——『五峰遺稿』と『一六遺稿』の贈答詩から——」(『新潟県文人研究』第二十三号、二〇二〇年十一月) など。
- (2) 『新潟県文人研究』第二十一号、二〇一八年十一月
- (3) 前掲『新潟県文人研究』第二十一号、一二二頁
- (4) 阪口仁一郎著『北越詩話』目黒甚七刊、一九一九年三月
- (5) 高橋源一郎編『吉田東伍博士追懷録』高橋源一郎刊、一九一九年九月
- (6) 阪口恭著、坂口献吉編『五峰遺稿』坂口献吉刊、一九二五年十月
- (7) 石川淳「阪口五峰」(『諸国崎人傳』筑摩書房、一九五七年十月)
- (8) 市島謙吉「追憶記」(坂口献吉編『五峰餘影』新潟新聞社、一九二九年十一月)
- (9) 例えば、早稲田大学図書館所蔵の阪口五峰手録、森槐南朱批『新潟紀勝詩』(請求記号…へ18 3268)に載る五峰「新潟嬉春詩」其の二はその一例である。
- | | |
|---------|----------------|
| 一族人煙擁港東 | 一族の人煙 港東を擁し |
| 六街三市遍東風 | 六街三市 東風遍し |
| 俗治天寶重生女 | 俗は天寶に沿りて生女を重んず |
| 地富物華多寓公 | 地は物華に富み 寓公多し |

- 紅杏酒香春店外 紅杏 酒は香ばし 春店の外
青山帆映夕陽中 青山 帆は映ず 夕陽の中
便言埋骨真無恨 便ち言はん 骨を埋むるも真に恨み無し
我亦閒情似柏翁 我も亦た閒情 柏翁に似たり
- 新潟市街の春景色を詠む詩であり、自注で「栢如亭句「六街三市起芳塵」又「此間何恨骨長埋」(栢如亭の句に「六街三市 芳塵起つ」、又た「此の間何ぞ恨まん 骨を長えに埋むるに」とあり)」と如亭の句を踏まえることを述べている。また、この詩には「槐曰秦淮佳麗亦不過如此(槐曰く、秦淮の佳麗も亦た此くの如きに過ぎず)」と槐南の評語が付される。「六街三市起芳塵」は「余再遊越。与石生叙旧于嵐川上。一夜生慙憑復游新潟。余畏海岸風雪險、決意東歸。途中偶思及、因作新潟圖、更系以詩、寄之」(『如亭山人藁初集』)と題する七絶の劈頭第一句、「此間何恨骨長埋」は「新潟」(同じく『如亭山人藁初集』)と題する七律の最終第八句である。
- (10) 阪口仁一郎「吉田君を憶ふ」(高橋源一郎編『吉田東伍博士追懷録』高橋源一郎、一九一九年九月)
- (11) 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六十三輯、二〇一八年三月
- (12) 五峰が川合直次に宛てた明治四十二年(一九〇九)三月十四日付の書簡には「七絶一首作り置候へども餘リニ拙劣ニ候へバイツレ槐南ニ相談ノ上ナラデハ御覽ニ入兼候」(川合直次「功勞に誇らぬ人」、坂口献吉編『五峰餘影』新潟新聞社、一九二九年十一月、二一四頁)とある。五峰は漢詩に於いては弱冠の頃より森春濤門下に入ったが、春濤歿後はその子息森槐南に詩の批正を仰いでいたこと、また一たび詩が成った際には然るべき斧正を受けて推敲した後、他の人々に示していたことが知られる。
- (13) 稿本が早稲田大学図書館に寄託されたのは大正七年(一九一八)一月の東伍没後のことなので、この(自注)は『吉田東伍博士追懷録』に収録する際に新たに付されたものであるう。
- (14) 市島謙吉「吉田博士に就て」(高橋源一郎編『吉田東伍博士追懷録』高橋源一郎、一九一九年九月)

(15) 「詩経」鄘風「定之方中」の「卜云其吉」句について毛伝に「建邦能命龜、田能施命、作器能銘、使能造命、昇高能賦、師旅能誓、山川能說、喪紀能誅、祭祀能語、君子能此九者、可謂有德音、可以為大夫（邦を建つるに能く龜を命じ、田して能く命を施し、器を作りて能く銘じ、使に能く命を造し、高きに昇りて能く賦し、師旅能く誓ひ、山川能く説き、喪紀に能く誅し、祭祀に能く語る。君子此の九を能くする者、德音有りと謂ふべく、以て大夫と為すべし）」と見える。

(16) 清、錢大昕「題程易疇說劬圖即用自題元韻」に「攻金良工久失傳、耳食何如取目驗（攻金の良工 久しく伝を失す、耳食 何ぞ如かん目驗に取るに）」とある。

(17) 市島春城が「第一吉田君は規則的の學問をした人ではない、所謂筋目立つた教育を受けた人ではない。明治の初年新潟に英學校の立つた自分、我輩がその學校へ入學した頃に、君は多分十一、二くらいであつたと思ふが、長兄に誘はれて同校へ入學したのである。幾許の間其處に學んだかは精しく覺ては居らんが、殆んど今日の中學を卒つた程度のものであつたと思ふ」（前掲「吉田博士に就て」、高橋源一郎編「吉田東伍博士追懷録」高橋源一郎、一九一九年九月、七九頁）と述べているように、吉田東伍の學校教育としての學歷は中學卒業程度であつた。

(18) 山田穀城（一八七六—一九三三）と推測される。五峰が社長を務めた『新潟新聞』の記者で、秘書のような役目で坂口家に起居していたという。歌人として「山田花作」と号し、『山田花作歌集』などの著がある。

(19) 「佩服に志す」は、忘れないように記録として誌すの意。

(20) 五峰の「題舟江嬉春図 四首」其の四（『五峰遺稿』卷上）には「煙波爲國八千水、佳麗開鄉三百春。却笑柏翁仙分薄、作圖惆悵記迷津」という句があり、ここでも柏木如亭を詩に詠んでいる。注（9）でも言及した如亭の「新潟」（『如亭山人藁初集』）という七律の首聯に「八千八水帰新潟、七十四橋成六街」にあるのを踏まえる。如亭の「新潟」詩が五峰愛誦のものであつたこと、五峰が作詩のうえで「數」にこだわっていたことを窺わせる。

(21) 市島謙吉「追憶記」（坂口猷吉編『五峰餘影』新潟新聞社、一九二九年十一月、一五四、一五五頁）。また、漢詩人館森袖海（字、鴻）は「君は詩を刻苦すること尋常に過ぐ、嘗て、湘南、槐南、湖村等に相談し改稿數次にして已まず朱墨塗抹殆んど讀む能はざるものあり」（館森鴻「五峰君の佚事」、前掲『五峰餘影』所収）と述べており、五峰の謹嚴な作詩態度の程が窺える。